



ゴーティエ・カプソン (2022.4.15) © 大塚道治

[Report]

開館25周年のスタートを 華やかに彩った2大プロジェクト

TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル
縁ある名手と紡いだ、唯一無二の豊穣な祝祭 柴田克彦

ハーゲン プロジェクト フィナーレ Part1
グランドフィナーレへの序章、万感の熱演 宮下 博

北村 阳 (チェロ)

“神童”から“真の音楽家”へ 飯尾洋一

[Schedule 2026.1~6]

[Information]

第17回 TOPPANチャリティーコンサート

ランチタイムコンサート Vol.138 特別企画

佐藤麻理(ピアノ)&瀧村依里(ヴァイオリン)&田原綾子(ヴィオラ)&築地杏里(チェロ)

ブルームス×JNO Chamber Colors／善養寺恵介 尺八演奏会

開館25周年のスタートを華やかに彩った、2大プロ 興奮と熱狂が渦巻いた全記録をレポート！



TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル

ハーゲン プロジェク

縁ある名手と紡いだ、唯一無二の豊穣な祝祭

柴田克彦

「TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル」は、まさしく「TOPPANホール以外では聴けない」豊穣な5公演だった。

核となったのはフォーレ四重奏団（以下フォーレQ）。30年間不動のメンバーで活動を続ける世界でも稀な常設のピアノ四重奏団である。緻密なアンサンブルと生気に富んだ表現を共生させた当グループは、近年TOPPANホールに数多く出演。ハーゲン・クアルテットと並ぶホールの顔となっている。

今回はさらに日下紗矢子（ヴァイオリン）、ニルス・メンケマイヤー（ヴィオラ）、笹沼樹（チェロ）、石川滋（コントラバス）という当ホールにゆかりの深い名手たちや、アンヌテ・ダッシュ（ソプラノ）も加わって、文字通りの「フェスティバル」が展開された。

しかも各公演は、ありがちなチクルス等ではなく、フォーレQの解体及び別奏者の参加によって新たなアンサンブルを生み出す興味に富んだ内容。そこには既にフォーレQの公演で古今のピアノ四重奏曲の大半を網羅したホールの強みが反映されているし、ある意味一步先を行く企画でもある。

初日の10月2日はフォーレQによるモーツアルトのピアノ四重奏曲第2番で開始。4人が溶け合いながら各楽章の特性が的確に浮き彫りにされる。お次はフォーレQの3人に日下とメンケマイヤーを加えたモーツアルトの弦楽五重奏曲ト短調K516。爽快にして濃厚な好演となつたが、感心したのは第1ヴァイオリンの日下が絶妙なバランスで全体をリードした点。「フォーレQとは初共演」という日下だが、まるで長年共に演奏してきたかのようだ。むろんメンケマイヤーも然り。その要因はドイツを地盤とする語法の共通性であろう。後半はフォーレQに石川を加えたシーベルトのピアノ五重奏曲《鱈》。ここは意外にシリアルで剛直な表現がなされる。そしてアンコールのブラームスのピアノ四重奏曲第1番第4楽章の推進力と熱量がフォーレQの真髄を明示した。

2日の10月4日はドイツ・ロマン派プロ。最初のメンデルスゾーンのピアノ四重奏曲第2番は、フォーレQが緊迫感と余裕を併せ持った佳演を聴かせる。2曲目はメンケマイヤーとフォーレQのピアニスト、ディルク・モーメルツによるブラームスのヴィオラ・ソナタ第2番。メンケマイヤーは豊潤な音色で雄弁な演奏を繰り広げ、モーメルツは精妙に共奏する。後半のシーマンのピアノ五重奏曲は日下が第2ヴァイオリンで加わって緊密なアンサンブルを成就。脈動感に満ちたこの快演は今回の白眉のひとつとなつた。シーマンのピアノ四重奏曲第3楽章のアンコールのしみじみとした味わいも絶品。初日ともども、ピアノ四重奏曲の有名楽章をフォーレQのみのアンコールで聴かせるのは、実に洒落ている。

3日の10月5日はフォーレQとダッシュの共演。ブラームスのピアノ四重奏曲第3番の楽章の間にマーラーとワーグナーの歌曲が挟まれた創意あふれるプログラムだ。しかもこうしたフェスティバルに歌を加えるという発想に本企画の懐の深さが表れている。ここでダッシュは、声を張り上げることなく、ナチュラルかつ細やかな歌唱を披露。フォーレQが芳醇に奏でるブラームスと相まって、各音楽の有機的な繋がりが示されていく。

その中の頂点はワーグナーの《ヴェーゼンドンク歌曲集》。同曲の多彩な表情や官能美を初めて体験したとの思いひとしおだ。さらに面白かったのが、全体を通して今回はないリヒャルト・シュトラウスの影を感じられたこと。シュトラウスの音楽の抛り所を実感できたのはひとつの収穫でもあった。

4日目の10月7日はウィーンゆかりの器楽曲。前半は、フォーレQの3人によるシーベルトの弦楽三重奏曲第1番に、メンケマイヤーとモーメルツによる《アルベジオーネ・ソナタ》が続く。精緻で余情あふれる三重奏曲も、引き締まった《アルベジオーネ》も秀演だったが、今回最大の成果のひとつとなったのが、モーツアルトのK516の5人に笹沼を加えたシェーンベルクの《浄められた夜》。これは、濃密さや叙情性、感情の振幅がフルに表現された、説得力抜群の名演だった。そしてここもまた日下（第1ヴァイオリン）のリーダーシップと力量に感嘆させられた。

5日目の10月8日はフォーレQとダッシュによるドイツのオペレッタ及びアメリカのミュージカルのナンバー中心のプログラム。馴染みの薄い作品を多く含むこの内容は、日本人ならまず発案しないだろう。フォーレQとダッシュは度々共演し、本プロも欧州で披露しているとのことだが、こちらはレアなステージを興味深く堪能した感が強い。ダッシュは各曲の機微を鮮やかに歌い分け、フォーレQのみの演奏にもじっと耳を傾ける。声ではなく歌と所作で聴かせる…それは彼女の巧みさと矜持の表れであろう。本公演は歌と室内楽の“艶”が融合した見事な締めくくりとなつた。

周到な企画力が唯一無二のフェスティバルを創造した5日間。ここにはTOPPANホール独自の魅力が集約されていた。

（しばた・かつひこ／音楽評論家）

10/2(木)
モーツアルト：ピアノ四重奏曲第2番 変ホ長調 K493／モーツアルト：弦楽五重奏曲 ト短調 K516／シーベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調 D667《鱈》

10/4(土)
メンデルスゾーン：ピアノ四重奏曲第2番 へ短調 Op.2／ブラームス：ヴィオラ・ソナタ第2番 変ホ長調 Op.120-2／シーマン：ピアノ五重奏曲 変ホ長調 Op.44

10/5(日)
ブラームス：ピアノ四重奏曲第3番 ハ短調 Op.60／マーラー：歌曲集《若き日の歌》より〈私は緑の森を楽しく歩いた〉〈思い出〉〈別離と忌避〉／マーラー：歌曲集《子どもの魔法の角笛》より〈トランペットが美しく鳴りひびくところ〉〈ライムの伝説〉／ワーグナー：《ヴェーゼンドンク歌曲集》／マーラー：歌曲集《さすらう若人の歌》より〈恋人の婚礼のとき〉

10/7(火)
シーベルト：弦楽三重奏曲第1番 変口長調 D471／シーベルト：アルベジオーネ・ソナタ イ短調 D821／シェーンベルク：浄められた夜 Op.4

10/8(水)
ドビュッシー：《ベルガマスク組曲》より〈月の光〉／エドゥアルド・フェルト：フォーレタンゴ／E.キュンネック：オペレッタ《リーセロット》より／E.カールマン：オペレッタ《チャールダッシュの女王》より／クルト・ヴァイル：オペラ《マリー・ギャラント》より／レナード・バーンスタイン：Lucky to be me／ヴィンセント・ユーマンス：Sometimes I'm happy ほか

グランドフィナーレへの序章、

現代を代表する弦楽四重奏団のひとつ、ハーゲン・クアルテットが幕引きにあたって、世界の音楽ファンへ別れを告げるのに選んだメインの会場は、ほかならぬTOPPANホールだった。

（ハーゲン・プロジェクト フィナーレ）と銘打たれた11月11日～13日の3夜連続公演は、全5回のパート1という特別な時間。万感こもる入魂の熱演を一音たりとも聞き漏らさまいと、聴衆が固唾をのんで向きあい、開館25周年を迎えた同ホールの歴史に特筆すべき1ページを刻みこんだ。

ハーゲン・クアルテットとTOPPANホールの縁は深い。初めて同ホールに登場した2003年以来、来演は計12回29公演におよぶという。西巻正史プログラミング・ディレクターとの深い信頼関係のおかげで、多くの実りある企画がもたらされた。

今回はそんな道程を振り返りつつ、演奏・解釈でもう一段の深化を最後に見せたのに驚いた。会場の特性を生かしたデリケートな弱音と落ち着いた響きを表現の軸に据えながら、日によってベクトルは変化した。内省的なアプローチで作品の苦みや悲しみをあぶり出した初日、肩の力が抜けた軽みと共に超弱音を意識的に駆使した2日目、現在と過去をめぐる振り子を想起させた3日目と、みごとな変わり身。演奏の集中度も高い。選曲をみると、作曲者の最晩年や苦境に生まれた作品が多い。有終の美を飾るために、本気で「さよなら」を言いに来たプログラムなのだ、と得心した。

初日（11日）の冒頭、J.S.バッハ《フーガの技法》の4曲では、静謐で柔らかな陰影が支配する。ほぼ切れ目なくショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲第8番へ流れ込んだ。弱音が極度の緊張をはらみ、作曲家の自画像といわれる苦み走った曲想へ肉薄。沈潜する悲しみや重い涙を、抑制の利いたダークな音色で描出していく。第4楽章のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロによるユニゾンは生身に突き刺さるような衝撃度を放ち、終楽章ラルゴの静まりかえった結びで客席は金縛りにあったようになつた。後半のシーベルト最後の弦楽四重奏曲第15番も、慈しむようによく歌う演奏。寂寥感がひたひたと迫り、悲劇性がいっそう際立つ。ショスタコーヴィチともども音楽の“怖さ”まで伝える厳肅さが、演奏者の尋常ではない気合いを映し出した。

そんな濃密な時間に臨む会場の空気が温かい。共に年月を歩み、追いかけてきたファンの思いが包み込んでいるようだった。この雰囲気はどこかで体験したな、と思ったら、2018年夏のザルツブルク音楽祭で最晩年のマウリツィオ・ポリーニを聴いた時を思い出した。同じ年輪を重ねた聴衆の心持ちは、やはり温かかった。今回、ホワイエに貼られた過去の公演ポスターには、多くの来場者が見入っていた。ホール側の愛情ある心遣いが嬉しかった。

2日目（12日）のコンセプトは新旧ウィーン楽派の対比だ。TOPPANホールで何度も集中的に取り組んだバートーヴェンから最後の弦楽四重奏曲第16番、そして後半にシーベルト《死と乙女》を持ってきた。このふたつの弦楽四重奏曲を組み合わせた録音がドイツ・グラモフォンに残

プロジェクト



ト フィナーレ Part1

万感の熱演

宮下 博

る。間に挟んだのはウェーベルンの《弦楽四重奏のための5つの楽章》と《6つのバガテル》。

同日のベートーヴェンは達観した余裕をたたえ、浮遊するような透明感と不思議な静けさを漂わせた。そこに割って入った無調のウェーベルンは、張りつめた超弱音が精緻を極めたニュアンスを発散し、気迫と切れ味で息が詰まるほど。この団体の先鋭さを改めて思い起こさせた。『死と乙女』はむしろナチュラルな表情に戻り、情緒に溺れない明快なドラマを築いた。この会場でしか出せない思い切ったピアニッシモの効果も著しかった。

迎えた3日目(13日)は、盟友でもあるクラリネット・現代作曲家のイエルク・ヴィトマンを招き、前半は彼の手によるクラリネット五重奏曲の日本初演、後半は古典派の傑作、モーツアルトのクラリネット五重奏曲。前者には、このホールの微細な音まで聴き取れる音響特性から生まれた表情記号「Toppan Staccato(トップパン・スタッカート)」が登場し、ホワイエにスコアが展示された。Senza misura(拍子なし)と書かれた冒頭では、持続時間が秒単位で指定されていた。

特殊奏法のオンパレードによる前衛的な部分と、調性の甘美な感傷を何度も行き来する約40分は、現在と過去の間を往復するような時間感覚を提示。研ぎ澄まされた弱音の威力が最大限に発揮された。作曲者の自作自演が現代なら、モーツアルトは過去へのリスペクト。時にポルタメントを用いるクラシカルな味わいに転じ、5人のホモジニティ(均一性)が極上のテクスチャを織りなす。第2楽章では解脱した境地が浮かび、第3楽章のこぼれ落ちそうな微笑を経て、フィナーレを幸福感で満たした。

3日ともアンコールはなし。本編で語り尽くした、という潔い意思表示なのだろう。

同じ時期にドイツ・グラモフォンに多くの録音を残したエマーソン弦楽四重奏団は、一足早く2023年で活動に終止符を打った。名称は同じでもメンバーが一変した団体もある。そういう世代交代期にあたり、律儀に義理を果たしてくれたハーゲン・カルテットには感謝しかない。余裕を持っての終結が、この団体の美学なのだろう。26年7月の残り2回は、45年に及ぶキャリアで本当のラスト・チャンス。名残惜しさが募る。

(みやした・ひろし／音楽ジャーナリスト)

11/11(火)

J.S.バッハ：フーガの技法 BWV1080より コントラブンクトゥス I～IV／ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲第8番 ハ短調 Op.110／シューベルト：弦楽四重奏曲第15番 ト長調 D887

11/12(水)

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第16番 へ長調 Op.135／ウェーベルン：弦楽四重奏のための5つの楽章 Op.5／ウェーベルン：6つのバガテル Op.9／シューベルト：弦楽四重奏曲第14番 ニ短調 D810《死と乙女》

11/13(木)

ヴィトマン：クラリネット五重奏曲(2017) *日本初演／モーツアルト：クラリネット五重奏曲 イ長調 K581

Yo Kitamura



“神童”から“真の音楽家”へ 現在地を刻む一夜

飯尾洋一

チェリスト北村陽の演奏を最初に聴いたのは2017年のこと。当時、北村はまだ13歳の少年だった。筆者が番組作りにかかわっているテレビ朝日「題名のない音楽会」の「神童たちの音楽会2017」に出演し、チャイコフスキーの《ロココ風の主題による変奏曲》の一部を弾いてくれた。収録会場は東京オペラシティコンサートホール。お客様も入ったなかで、少年はニコニコ顔で堂々たる演奏を聴かせてくれた。演奏中の朗らかな表情は、みんなをハッピーな気分にしてくれる。演奏を終えて感想を尋ねられると、こう答えてくれた。『オーケストラの海で泳いでいる気分』。なんという秀逸なコメント。これは奏者でなければ思いつかない言葉だろう。

テレビは「神童」という言葉を好む。いや、正確にいえば視聴者が好む、というべきか。番組でも神童特集は人気企画とみなされており、定期的にこれぞという人に出演してもらう。しかし、音楽系の活字メディアは「神童」という言葉に対してもっと慎重だと思う。少年時代のモーツアルトやサン=サーンスみたいな歴史上の人物に対してなら躊躇なく使える言葉だが、今を生きる子供たちに使うとなれば気を使ことが多い。まだ将来どうなるかわからないのだから、あまり気安く使うのはどうかな、と思ってしまう。そんなこともあり、「神童」とうたって紹介した才能が、そのまますくすくと成長してくれるかどうかはとても気になるのだ。

しかし、北村陽についてはほとんど気を揉む必要がなかった。なにしろすでに9歳でオーケストラと初共演し、その翌年にはリサイタルを開いている。早い段階からオーケストラとの共演が多く、その後の活躍ぶりも継続的に目に入ってきた。やがて2023年の第29回ヨハネス・ブラームス国際コンクール第1位、2024年ジョルジウ・エヌスク国際コンクール・チェロ部門優勝、同年のパブロ・カザルス国際賞第1位など、次々と快挙を成し遂げて、大きく羽ばたくことになった。

だから、2024年にTOPPANホールの〈ランチタイムコンサート〉に登場した際は、なによりも「立派な音楽家に育った」という感慨があった。しかもその日は無伴奏チェロ・リサイタルで、プログラムが強烈に尖がっていた。リゲティ、三善晃、コダーイらが並び、ランチタイムに聴くとは思えないほど歎ごたえがある。鮮やかなテクニックに加えて、表現のスケールも大きく、燃焼度の高い演奏が記憶に残った。

その北村が3月20日にTOPPANホールに帰ってくる。今回はベルリンで日頃から北村とともに演奏しているという菌田奈緒子のピアノと共に演奏で、前回の無伴奏に続いて、またも意欲的なプログラムが組まれた。冒頭に一曲、前回の無伴奏の番外編のようにサーリアホの《ララバイ～無伴奏チェロのための》を置き、ショスタコーヴィチのチェロ・ソナタ、クレンゲルの《チェロとピアノのためのスケルツォ》、ナディア・ブランジェの《3つの小品》、ブランクのチェロ・ソナタと続く。一晩のリサイタルとしては、恐るべき濃密さと言ふべきだろう。ただならぬ意気込みが伝わってくる。

サーリアホの《ララバイ》は曲名だけからはわからないが、オリヴァー・ナッセンを追悼して書かれた作品。悲しみのみならず、さまざまな感情が小曲のなかにつめこまれている。作風は異なるがショスタコーヴィチのチェロ・ソナタにも多様な要素がある。抒情性、アイロニー、ロマン、ユーモア…。「音楽ではなく荒唐無稽」とプラウダに批判される以前の情緒のジェットコースターぶりが聴きどころ。クレンゲルはチェロ・アンサンブルのための《讃歌》がよく知られるが、それ以外の作品を聴く機会は貴重。《スケルツォ》は技巧的だ。近年再評価が進むナディア・ブランジェからは《3つの小品》を。締めくくりがブランクのチェロ・ソナタというのも味がある。軽妙洒脱だが、至るところにメランコリーが潜む。光を当てる角度によって、いろいろな姿が浮かび上がるという点では、ショスタコーヴィチとも共通する。不思議な宝石箱のようなプログラムに期待が募る。

(いいお・よういち／音楽ジャーナリスト)

北村 阳(チェロ)

2026年3月20日(金・祝) 18:00

菌田奈緒子(ピアノ)

サーリアホ：ララバイ～無伴奏チェロのための(2018)

ショスタコーヴィチ：チェロ・ソナタニ短調 Op.40

クレンゲル：チェロとピアノのためのスケルツォニ短調 Op.6

ナディア・ブランジェ：3つの小品

ブランク：チェロ・ソナタ

5,000円／U-25 2,500円 全席指定

特別協賛：東急建設株式会社

2026年2月9日(月) 19:00

ティル・フェルナー(ピアノ) mit

Trio Rizzle &郷古 廉(ヴァイオリン) 完売

毛利文香(ヴァイオリン)／田原綾子(ヴァイオラ)／笛沼樹(チェロ)

シューベルト：ヴァイオリンとピアノのためのソナタト短調 D408

マルティヌ：弦楽三重奏曲第1番

ドヴォルジャーク：ピアノ五重奏曲 イ長調 Op.81

特別協賛：株式会社きんぐん

2026年3月4日(水)、3月5日(木) 各日 19:00

ベルリン古楽アカデミー 完売

平崎真弓(ヴァイオリン、コンサートマスター)

クセニア・レフラー(オーボエ)／ラファエル・アルバーマン(チェンバロ)

I—Pure Bach

J.S.バッハ：

管弦楽組曲第2番 イ短調 BWV1067(ソロ・ヴァイオリン付き第1稿)

ヴァイオリン協奏曲第1番 イ短調 BWV1041

オーボエ協奏曲 ト短調 BWV1056R

チェンバロと2本のリコーダーのための協奏曲 へ長調 BWV1057

2つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調 BWV1043 ほか

II—Bach & Beyond

J.S.バッハ：管弦楽組曲第3番 ニ長調 BWV1068(第1稿 弦楽版)

アルビノニ：オーボエ協奏曲 ニ短調 Op.9-2

J.S.バッハ：チェンバロ協奏曲第5番 ヘ短調 BWV1056

J.S.バッハ：オーボエとヴァイオリンのための協奏曲 ハ短調 BWV1060R ほか

2公演特別協賛：株式会社 安藤・間

助成：ゲーテ・インスティトゥート

2026年3月6日(金) 19:00

ゴーティエ・カブソン(チェロ) & ブランク・ブライ(ピアノ)

ベートーヴェン《チェロ・ソナタ》全曲 完売

ベートーヴェン：チェロ・ソナタ

第1番 へ長調 Op.5-1／第4番 ハ長調 Op.102-1／第2番 ト短調 Op.5-2

第3番 イ長調 Op.69／第5番 ニ長調 Op.102-2

特別協賛：清水建設株式会社

◆今後の主催公演から



充実の年内公演に続き、年明けも室内楽の悦びにあふれるコンサートが次々に続きます。TOPPANホールが長らく、その歩みをじっくり見守っているフェルナーはTrio Rizzle、郷古廉と室内楽を。いまも古楽界の最前線をひた走るベルリン古楽アカデミーは2日間のプログラムを引っさげて7年ぶりに帰還。TOPPANホールで日本デビューを飾り、今や押しも押されもせぬ世界最高のチェリストの一人となったゴーティエ・カブソンは、盟友にしてホール初登場となるブランク・ブライと、ベートーヴェンのソナタ全曲を聴かせます。

いずれも今回の号でご紹介予定でしたが、おかげさまで発売早々に完売となりました。チケットをお持ちのお客さまは、引き続きどうぞ期待ください。

SCHEDULE

2026.1~6

主催公演

TOPPANホールチケットセンター 03-5840-2222

日時		公演
1 / 7	(水) 19:00	TOPPANホール ニューカーネーションコンサート 2026 1909年製ベーゼンドルファーとの邂逅 山根一仁(ヴァイオリン)／嘉田真木子(ソプラノ) 川口成彦、兼重穂(ピアノ)
2 / 9	(月) 19:00	ティル・フェルナー(ピアノ) mit Trio Rizzle & 郷古廉(ヴァイオリン) 毛利文香(ヴァイオリン)／田原綾子(ヴィオラ)／笛沼樹(チェロ)
4 / 10	(水) 19:00	ベルリン古楽アカデミー I—Pure Bach II—Bach & Beyond
5 / 11	(木) 19:00	平崎真弓(ヴァイオリン、コンサートマスター) クセニア・レフラー(オーボエ)／ラファエル・アルバーマン(チェンバロ)
3 / 12	(金) 19:00	特別協賛: 株式会社 安藤・間 ゴーティエ・カブソン(チェロ) & フランク・ブラレイ(ピアノ) ベートーヴェン《チェロ・ソナタ》全曲
20	(金・祝) 18:00	北村陽(チェロ) 蔦田奈緒子(ピアノ)
4 / 4	(土) 18:00	特別協賛: 東急建設株式会社 アンナ・プロハスカ(ソプラノ) with ジョヴァンニ・アントニーニ(指揮・リコーダー) イル・ジャルディーノ・アルモニコ
5 / 12	(火) 19:00	レオンコロ弦楽四重奏団

日時		公演
5 / 26	(火) 19:00	ニコラ・アルトシュテット(チェロ) プロジェクト 第1夜—Duo ヨーナス・アホネン(ピアノ)
29	(金) 18:30	第2夜—マラソンコンサート イリア・グリンゴルツ、毛利文香(ヴァイオリン)／原麻理子(ヴィオラ)／ヨーナス・アホネン(ピアノ)
6 / 10	(水) 19:00	トリオ・ヴァンダラー
		〈ランチタイムコンサート〉 TOPPANホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート
2 / 13	(金) 12:15	特別企画 佐藤麻理(ピアノ)&瀧村依里(ヴァイオリン)& 田原綾子(ヴィオラ)&築地杏里(チェロ) Vol.138
5 / 2	(土) 12:15	〈1909年製ベーゼンドルファーの息吹Ⅲ〉 ベーゼンドルファーModel250、スタインウェイD それぞれの魅力 橋高昌男、津野絢音(ピアノ) Vol.139

※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス【要予約・有料】をご利用いただけます。
ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。

2025年12月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています

※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION

第17回 TOPPANチャリティーコンサート
親密な対話が織りなす上質な音楽のひととき

荒井里桜(ヴァイオリン) & 田所光之マルセル(ピアノ)

2026年3月13日(金) 19:00

ドビュッシー: ヴァイオリン・ソナタ

ブランク: ヴァイオリン・ソナタ

チャイコフスキイ: 『18の小品』より〈遠い昔〉 Op.72-17 [ピアノ・ソロ]

チャイコフスキイ: ワルツ・スケルツォ ハ長調 Op.34

フランク: ヴァイオリン・ソナタ イ長調

全席指定: 5,000円 ※印刷博物館入場可(当日のみ)

主催: TOPPANホールディングス株式会社

寄附先: 公益財團法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

チケットのお申し込み・お問い合わせ: TOPPANホールチケットセンター

アーティストたちの熱演が刻まれてきたTOPPANチャリティーコンサート。17回目となる今回は、荒井里桜(ヴァイオリン)が田所光之マルセル(ピアノ)とともにフランスの三大ヴァイオリン・ソナタに挑みます。

荒井は東京芸大を卒業後、留学先のスイスでジャニース・ヤンセンに師事。第87回日本音楽コンクール第1位など、当時すでにその実力は多くの人が知るところでしたが、その後も海外での研鑽や様々な音楽家たちとの共演を重ねるなかで、瑞々しい感性は磨かれ続け、いま最も注目を集めているアーティストの一人となりました。現在はベルギーのエリザベート王妃音楽院でオーギュスタン・デュメイに師事する傍ら、日本国内での演奏活動にも意欲的に取り組んでいて、その活動内容も多彩。とどまることなく進化を続けています。

一方の田所も、ソロはもちろんのことヴァイオリニストとの共演も多数。共演者とともに音楽を創りあげる表現の豊かさ、繊細さは高く評価されています。今回、プログラムの中に据えられたドビュッシー、ブランク、フランクのヴァイオリン・ソナタは、荒井の魅力を際立たせると同時に、日本とフランスの感性をあわせ持つ田所のピアノが加わることで、思いもよらぬ新たな輝きを放つに違いありません。

今回が初共演の二人だからこそ新鮮な驚きや未知なる化学反応に、どうぞご期待ください。

TOPPAN
CHARITY
CONCERT

本公演の収益は、公益財團法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) に寄附され、カンボジア女性の識字学習支援事業「SMILE ASIA プロジェクト」の推進に役立てられています。

4人の若き名手が紡ぐ、ウィーンの香り漂う優美なアンサンブル



〈ランチタイムコンサート Vol.138〉 特別企画

1909年製ベーゼンドルファーの息吹 II

佐藤麻理(ピアノ) & 瀧村依里(ヴァイオリン) & 田原綾子(ヴィオラ) & 築地杏里(チェロ) 弦と交わる、弦を彩る

2026年2月13日(金) 12:15

マーラー: ピアノ四重奏曲断章 イ短調

ショーマン: ピアノ四重奏曲 変ホ長調 Op.47

2,000円 全席指定

【TOPPANホールクラブ】

ゴールド会員: 1枚無料 / レギュラー会員: 1枚のみ 1,500円

表紙:ゴーティエ・カブソン

今や世界を舞台に華やかに多彩に活動する、人気・実力ともに当代最高のチェロの貴公子、ゴーティエ。2022年4月、不穏な世界情勢の真っただ中に来日し、豊穣な響きとあたたかな音楽で聴衆を魅了した公演より、その強い眼差しが印象的な一枚を。冒頭、平和を願ってサプライズ演奏された《鳥の歌》は、強く胸をうち客席の涙を誘いました。3月のベートーヴェンに期待。

編集後記

開館25周年のアニバーサリーシーズンが始まって、3か月。TOPPANホールらしく独創的な企画の数々でお迎えしていますが、お楽しみいただけていますでしょうか? どの公演も皆さんに深い余韻を残させていました幸いです。今号では、早くも今シーズンのハイライト

の様相を呈した大型プロジェクト、〈TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル〉(ハーゲン プロジェクト フィナーレ Part1)を徹底レポート。アーティストの表情豊かな写真とともに、当夜の衝撃と興奮がよみがえる文章を、ぜひ年末年始のひとときのお供に。(雪)